
E=ベイビー

YOHANE

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

E=ベイベー

【Nコード】

N7819D

【作者名】

YOHANE

【あらすじ】

身元不明の殺人犯が一人、また一人と増える。この事件の担当となった保坂刑事は頭を悩ませつつも必死で解決を目指す。上から捜査中止命令を出されてしまった。殺人犯達の目的と、その謎に包まれた出生とは…？

某月日

もう、

何も見えず、何も聞こえない

朝なのか、夜なのか…

全てが真っ白だ

ああ

僕はもう死んでしまう

僕の言葉は届いただろうか？

それだけが、気がかりだ…

7月20日

けたたましいサイレンを鳴らし、数台の消防車と救急車が近づいてくる。

まだ6時前。

天宮ライムはまどろみの中でその音を聞き、寝がえりをうった。間もなく音が遠ざかり、そして朝の静けさの中に消えるとライムは目覚ましが鳴るまでとまた眠りに就いた。

+ . + . + . + . +

「くそっ！！なぜ開かないんだ！！！」

パスワードを入力しても、Errorとしか表示されず扉は開かない。先程火災を知らせる放送があつてから、もう数分。

研究に没頭し、他の研究員が帰宅した後も1人残っていたのがあだになってしまった。地下にあるこの部屋では携帯の電波も通じないたとえ火がここまで来なくても、自分の不在に気づいてもらえなければ救助までは長くかかるだろう。

「誰か！！まだ残ってるやつはいないのか！？」
激しく扉を叩く。

ピーー

高音のブザーが鳴ると、目の前の扉がゆっくりと開いた。生暖かい風が流れ込む。

「助かった…！」

息を吐いて扉を開けてくれた人物を見上げて、眉をしかめた。

「…誰だ、お前…？」

見知らぬ顔。ここ地下に足を踏み入れられる人物は限られていて、その全員と顔見知りだ。安堵の表情に警戒の色が現れた。

「草薙茂樹 くさなぎしげき だな？」

「そうだが、質問しているのはこつちだ。お前は」

誰だ…？そう口にしたはずなのに、実際にはくぐもった呻きが漏れた。

「お前は、知っているはずだ」

腹部に走った激痛に目をやると、そこには深々とナイフが突き刺さり、見る間に赤い染みが広がっていく。

「なッ!？」

驚き尻もちをつくとき、その衝撃が腹に伝わり眉を寄せた。

不審な人物は冷たい眼で草薙を身をろしている。額に脂汗を浮かべながらその顔を見上げるが、見覚えはあれども名前は出てこない。

「お前はここで死ぬ」

抑揚のない声で言うと、草薙の腹に刺さったナイフを躊躇 ためら

いなく抜いた。

「グアア!!!…うっ…ぐ…」

勢いよく飛び出した血を止血しようとして手を当てるが、止まる気配はない。

「助けてくれ!!!金は好きなだけ…!!」

平然と立ち去ろうとする背中に草薙は必死で命乞いをした。

「当然の報いだ」

振り返ることもなく答えると、絶望する草薙の前で扉はゆっくりと閉まった。

隙間から侵入してきた煙が部屋を満たし、全てを炎の渦に巻き込む頃には草薙の意識はなかった。

+・+・+・+

朝のテレビで、その火事のニュースは淡々と読み上げられた。ライムは制服のリボンを結びながらそれに聞き入った。

「お父さん、朝のサイレン気づいた？たぶん、これだよー」

火災に遭ったのはサユリ医療研究所。地下からの出火らしく、建物は半焼。被害者については不明。出火原因については、実験の失敗ではないかの見方で調査を進めているらしい。

「ライム、遅刻するよ」

「あっ！ホントだ！行ってきまーす」

「いつてらっしやい」

ライムが出かけると、ライムの父はテレビを消して深く息を吐いた。コーヒーの味が、いつもより薄い気がした。

7月23日(1)

コンコン。

タイピングの音と機械音だけが響いていた書斎に、ノックが鳴った。

「どーぞ」

ドアノブが捻られ、人の気配が近づいてくる。江島美里はパソコンから目を離さずに動きを窺う。

「順平？何か用なの？」

それでも黙ったままの順平に椅子を回して振り返った。40代近い彼女の顔の目元には深いシワが刻まれている。こめかみを押さえ、疲れ切ったように息を吐いた。

「…何か言ったらどうなの？」

美里の前に立ち尽くす青年は、無機質な目で美里を見下ろしていた。最近、いつも表情のない目をしている。それがすごく苛立つ。

「何よ、その目」

不機嫌さが露の声で言って順平を睨みつけるが、順平がそれに動じる様子はない。

「用がないなら出て行って。ただでさえ忙しいのに…目障りよ」

美里は椅子を軋ませながらまたパソコンに向き合う。

「死んだ」

「は？」

ようやく声を出した順平に顔だけ振り返った。

「だから」

順平が一步を踏み出す。相変わらずの無表情の中に、底知れぬ怒りが見え隠れしていることに気づき、美里は息を飲んだ。

「ちよっ…何よ!?!」

背中後ろに隠されていた手がゆっくりと前に出される。

「ひっ!?!?!?!」

真つすぐに美里へ向けられた、曇り一つない刃。順平の手に握られたバタフライナイフに迷いはない。

「お前も死ぬべきだ」

一度刃が勢いをつける為に美里から外され、そして首元を真一文字に横切るまで…。

美里は悲鳴を上げることすらできずにスローモーションで刃の行方を追ひ、冷たい痛みを感じると派手に椅子から転げ落ちた。順平は数度痙攣し、すぐに動かなくなった美里を冷たい目で見つめた。

飛び散った血は順平とパソコンに付着し、そして床にじんわりと広がっていく。

初めて嗅ぐ酸鼻さんびに順平は眉をしかめる。

「奥様?…どうかなさいましたか?」

小さい足音と共に顔を覗かせた家政婦は、目を見張って順平と美里を交互に見た。

「ぼっちや…」

「警察呼べよ」

あまりの出来事に頭が付いて行かないのか、順平がそう促しても家

政婦はそこを動こうとしない。

「俺が殺したんだ。お前も殺すぞ」

毒を孕んだ声で言うと、家政婦は弾かれたようにその場を離れた。

数分後。

警察が江島邸に到着した時、順平は書斎の机に腰掛けて美里を見下ろしていた。警官が警戒気味に近づいてきても眼中にないといった感じだった。

「江島順平！殺人罪の現行犯で逮捕する！！」

そう高らかと宣言しながら手錠をすると、順平が薄く笑ったような気がした。

7月23日(2)

セメントの壁に囲まれて、寒々しい雰囲気のある個室。1つのテーブルと3つの椅子。向かいには本日逮捕されたばかりの青年が、隣には記録係の部下が座っている。

ほさがたけあき
保坂武明は苛立った表情で青年に向き合った。

「名前は？歳は？」

「江島、順平。19」

順平が答えると、保坂は自分を落ち着かせるために深く息を吐いた。この仕事に就いて20余年。色々な容疑者との対話を経験してきた。40を超えた保坂はベテランと言われている、自分でも自負している。

「本名は!？」

「江島順平。さっきからその質問ばっかだな」

呆れたように言う順平に保坂の苛立ちは増す。眉間に刻まれた皺がまた深くなった。

出会った多くの人の中には、精神異常をきたし、会話にならない奴もいたし、それを装って罪を軽減させようとしたやつもいた。罪を正当化しようとする必死になり、嘘を吐く奴も多かった。

その言葉の真偽を見極め、裏を探るのも刑事の大事な能力だ。

「本当のことを言え」

保坂は真つすぐに順平の目を捉えた。

「名前は江島順平。歳は19。江島美里を殺したのは俺だ」

順平も真つすぐに保坂を見返した。緊迫した空気が流れ、記録係は唾を呑んだ。

「お前がいくらそう言ってもだな…」
保坂は肩の力を抜くと背もたれに寄り掛かった。

「江島順平”なんて存在していない」

順平の表情の変化を保坂は見逃さなかった。

「ちゃんと調べたんだろうな？」

「当たり前だ」

戸籍にも、どこにも“江島順平”については記されていないかった。同姓同名の数人も確認したが、いま目の前に座っている“江島順平”と思しき人物はいなかった。

「でも、俺は“江島順平”として存在してきた」

自嘲するような言い方だが、目には悲しみの色が映ったような気がした。

それに気付きつつも、これ以上この話題は発展しないと判断し保坂は質問を変える。

「なぜ、江島美里を殺した」

「なぜ”…？」

顔を上げた順平の瞳からは悲しみの色が消え去っていて、その代りに憎悪に塗られていた。保坂は急変した順平の様子に身を引きそうになった。

「俺が心臓病だから」

返ってきた答えに、保坂は驚きを隠せなかった。

「心臓病だと？」

「大きなシヨックがあればいつでも死ねるよ」

順平は口元を歪めて笑った。

「…心臓病を患う体に産んだ江島美里を恨んでいるのか？」

保坂が予想を言うと、順平は軽蔑した目を見せた。

しかし、目を伏せると「そんなとこだ」と一言呟いた。

「それだけのはずはないだろ？」

保坂は探る様に順平を見る。

心臓病が彼にもたらしたハンデはどれ位のものは計り知れないが、親を殺すほどの恨みとも思えない。それに、入院もせずにいられる状態なのだからさほど重度ではないのではないか。

「当然の報いだ」

順平は吐き捨てる。そして、保坂がそれに対して質問をする前に言葉が続けた。

「アイツは苦しめ続けた…」

「何があつた？」

苦しげに眉を寄せる順平に、保坂の言葉は耳に入っていない。

「なぜ、俺は心臓病なんだ？」

「…」

「アイツは殺されて、死んで当然の事をした！アイツは殺した！俺の仲間を！！」

そこまで捲くし立てると、荒くなった息を整えた。心臓の辺りをぎゅっと握り、肩を上下に揺らす。

「殺しただと！？江島美里がか？」

「はあ…はあ…」

順平は保坂から、拘束する手錠に視線を落とした。

薄っすらと額に脂汗が浮かんでいる。息が落ち着いてきたので取りあえず心配はなさそうだ。

「お前の仲間とは誰だ？」

「…はあ…」

荒く息を吐くだけで答える気のない順平に、保坂は立ち上がりテールブルを叩いた。

「答える！！！」

順平は怯える様子も驚いた様子もなく保坂を平然と見上げる。

「関わらない方が、あんたの為だ」

そしてそう言ったきり押し黙った。

+ . + . + . + . +

「くそっ」

保坂は先程の取り調べについて頭を悩ませていた。

自称・江島順平が嘘を吐いている様子はなかった。なのに、社会的にあの江島順平は存在していないことになっている。江島美里は独身で、出産の記録もない。

どことなく嫌な予感がする。

江島順平も遠まわしに「関わるな」と言っていた。しかも、「あなたの為」だという。江島自身の保身ではなく、私を気遣ったことだ。

江島美里が江島順平の仲間を殺したとか、自身は心臓病だとか……。気にかかることは多々あるが、何よりもあの憎悪すら見え隠れする瞳が印象的だった。

彼は嘘を吐いていない。

しかし、

全てを話したとは到底思えなかった。

「…明日また話を聞くか」

保坂は首を回して肩の凝りを取った。

7月24日(1)

順平が起こした事件はまだ世間には公になっておらず、いつもと変わらぬ朝の時間が流れている。

「笑子、コーヒー」

「はい」

ソファに踏ん反り返り、新聞から目を離さない父・片岡聡を一瞥すると、笑子は台所に向かった。コーヒーのほろ苦い独特の香りが笑子は苦手だ。白い粉と、同色の液体を入れると、スプーンでかき混ぜた。コーヒーが変色すると、無言でそれを聡の前に差し出す。聡も無言でそれを受け取り口をつけた。

クリームでマイルドになったコーヒーが聡の喉を温めながら落ちていく。

「美味しい？」

「…は？」

最近、何が原因かは分らないが笑子は口をきくどころか顔も合わせようとはしていなかった。それについて寂しいという感情は皆無だが、気になることではある。

「心を込めたの」

聡は新聞から目を外し、笑子の笑顔を見た。頬には笑窪えくぼができているが、細くなった目はどこか挑発的だった。

違和感を感じながらも、聡はまた一口コーヒーを飲む。

「最後だもん。ちゃんと全部飲んで」

言葉の質が変わるのが分った。カップから口を離し聡は眉を寄せて鋭い目で笑子を睨みつけた。

「何だと…」

そう言った瞬間、聡は込み上げる悪心を堪え切れずに口に手をあてた。喉やら気管やらが焼けるように熱く、痛い。

「ゲボツ!!? ゲツ ゲホっ…」

ビチャッと手に生暖かいものが吐き出された。確認しなくとも、口に広がる鉄っぽい味でそれが何なのかすぐに分った。

「なに、を…」

「アンタ達こそ、今まで何してきたのよ」

呼吸する度に口からは血が溢れてくる。このままでは出血多量で危険だ。

「毒を盛ったんだけどね、ソレ、この家にあつたのよ?」

笑子はポケットから小さな袋を取り出すと聡の前にかざし、余裕の笑みを漏らす。

「アンタなんか死んで当然。それでも、本当はもつと足りない」

聡は椅子から落ちて片膝をついた。クリーム色の毛の絨毯じゅうたんに赤黒い染みが広がる。

「ゲホっゲホっ…はあ…」

言葉を紡ごうとしても、喉に血が詰まり呼吸するだけで精いっぱい
の状況だ。顔面は蒼白で、毒の作用か目は黄色に変色し血走っている。

「…顔色悪いね。血、吐き過ぎなんじゃない??」

笑子は愉快そうに笑った。

「私の血で良ければ、あげようか？」

しゃがみ込んで聡の視線に合わせる。しかし、聡はもう焦点の合っていない虚ろな目をしていた。そして、大きく身震いして大量の血を吐き出しながら床に突っ伏した。

7月24日(2)

「あ、保坂さん！」

背後から呼び止められて、保坂は足を止める。昨日記録係をしていた部下だ。

「これから何か重要な用事でもおありですか？」

「いや。昨日の江島順平のところに行こうかと思ってはいたが…。どうかしたか？」

「はい。さつき署に自首してきた少女がいるんですが…。」
彼は言いにくそうに言葉を切った。

「また身元が分からないんですよ…。父を殺したって言うんですが、被害者の子供の記録はないし…」

昨日の少年とは何か関係があるのだろうか？

「類似の事件ということ、保坂さんに回ってきたんで、取り調べをお願いしたいんですが…」

「分った。今から向かおう」

保坂は順平を収容している房に続く道に背を向けると、取調室へと向かった。

そこに居たのは、ごく普通の少女。パイプ椅子に行儀よく座っている。普段の今の時間なら高校で授業を受けているかもしれない。

「保坂だ。君の名前は？」

軽く頭を下げながら少女の前に座る。

「片岡笑子。17歳。まだ確認取れてないの？」

保坂が来る前にもう何度も聞かれていたのだろう、笑子は呆れたように溜息をついた。保坂は曖昧に笑う。

「自首したんだって？」

「ええ」

そういえば、江島順平も抵抗せずに連行されてきたな。

「あ、でも誤解しないで」

笑子は続けた。

「アイツを殺した事を後悔してとかじゃないから」

どうやらそこをはつきりさせたいらしい。

「じゃあ、なぜ？」

「目的を達成したから」

笑子は後悔も悪びれもせずに言った。

「なぜ殺したんだ？」

「あんな奴死んで当然じゃない！当然の報いよー！！」

笑子は急に険しい顔になって声を荒げた。

「当然の報い？」

どこかで聞いた言葉だ、と保坂は記憶を遡ると、すぐにそれを思い出した。

「…江島も…」

無意識に呟いてしまった言葉を笑子は聞き逃さなかった。

「江島…？江島って、江島順平！？」

しまったと思っても後悔しても遅い。笑子は身を乗り出して保坂に詰め寄った。手錠の鎖が重い音を立てる。

「順平もここに居るの！？会わせて！！順平に会わせて！！」

「落ち着け、江島順平を知っているのか？」

肩を押さえて宥めながら保坂は聞いた。

「知ってる！だから、会わせて！！」

「無理だ。江島も、お前も、身元ははっきりしないが犯罪者同士だ。会わせる訳にはいかないし、そんな自由もない」

「お願い……！」

笑子は涙ぐんでいる。先程までの落ち着いた態度とは大違いだ。

「……どうしたら会わせてくれるの？」

笑子は顔を伏せると、弱弱しい声で言った。こんな風に泣かれるのは経験のないことで、保坂は頭を掻いた。

「ちゃんと質問に答えてくれ。そうすれば、会わせることはできないがお前の存在を江島に伝えてやる」

「……」

笑子は疑うような潤んだ目で保坂を見る。

「約束しよう」

「……分った」

渋々といった感じだが、現状はこれが限界かと笑子は頷いた。

「まず、“当然の報い”と言ったが、何に対しての報いなんだ？」

「……私という存在に対して」

「……どうということだ？」

「私の身元、まだ分かってないんでしょ？」

保坂は頷く。それを確認して笑子は自嘲の笑みを浮かべた。

「戸籍もない私は、存在してないのと、同じ」

瞳から光が消えていく。

「何をされても、誰にも知られずに終わっていくの」

「何をされたんだ？」

笑子は首を横に振った。「知らない方がいい」と。

「それを知れなければ捜査が進められない」

江島も昨日そこで口を閉ざしてしまった。事件の核心に近いと思われるその問いの答えを何としてでも得なければならぬ。

「喋る気はあるけど、もうちょっと待つて。今は、まだ…言えない」

質問に答えなければ順平との繋がりを得る事が出来ないだけに、笑子は必死に言葉を選んだ。

保坂を謀る為の言い訳を考える時間を欲している訳ではないというのは分かった。笑子は辛そうに視線を逸らしている。

「私のため、か？」

保坂がそう言うと、笑子は苦笑したが答える気は無いらしい。

「では、また今度聞くことにするが…。江島順平とお前の関係は？今それ以上踏み込む事は無理だと察し、保坂は質問を変える。

「付き合ってる。順平は私の彼氏だよ」

「彼氏…？」

保坂は目を丸くした。

江島順平と片岡笑子が恋人同士だど？だったら、あんなに会いたが

っていたのにも理由がつく。

「いつ、知り合った？」

「ん」。物心ついた頃にはもう一緒だったからな」

笑子は思い出して顔に幸せそうに笑った。

「幼馴染みか？」

「幼馴染みの定義をよく知らないんだけど…。一緒に育ったの」

「江島と片岡の家はそんなに親しかったのか？」

その家の名前が出ると、笑子の顔はまた曇った。不快だと言わんばかりだ。

「知らない。だって、私と順平は施設で育ったから。孤児院ってやつ」

順平から聞いてない？と笑子は付け足した。

2人が施設で育ったというのなら…。

「義理の母に義理の父が…」
だがそうすると、江島順平が殺人を犯した理由が当て嵌まらなくなる。

「いつから施設にいるかは覚えているか？」

「覚えてない」

「どこの施設だ？」

「みどりの森愛育園」

耳にしたことのない施設だが、それは後で調べれば分る事。江島順平と片岡笑子についても聞き込みに行く必要があるな。

「…あれはどうやって手に入れた？」

「あれ」？

笑子は首をかしげる。それから、言いたい事が分つたらしく「ああ」と頷いた。

「片岡聡が所持してたのよ。まだあの家にあると思う」

種類は分らないが、人を殺せるほどの猛毒が子供の手の届くところに置いてある。そして、笑子は平気でそれを使った。

「なぜ片岡聡がそんな物を持っている!？」

「知らないわよ。それを調べるのは警察の仕事でしょ」

笑子がそつげなく答えると、保坂の片眉が痙攣けいれんした。

「死ぬと分つて、その毒を使ったのか…？」

「ええ」

平然と答える彼女の目に、やはり後悔の類の色は無い。それよりも、心をざわめかせる様な瞳を時折見せる。その目に見つめられると、何かを見透かされているようで落ち着かない。

殺人を犯しても後悔しなかった奴は多い。虐げられたり失恋の恨みだとか、ムカついて衝動的だとか…。

だが、理由は様々ながらに加害者に共通点があった。

それは瞳の奥の狂気。

取り調べの最中も、保坂を見ているようで誰とも目が合ったりはしなかった。急に笑い出して止まらなくなっていた奴もいた。こういう奴等を野放しにすれば、大量殺人鬼ができあがるのかなあ…と、ぼんやり思った事もあったっけ。

「ねえ。もう質問ないんだったら、さつさと順平の所に行つて来て」

だが、瞳に奥深さを持ちながらも、目の前の少女は平然と落ち着いている。少し取り乱しはしたものの、狂気からではなかった。

笑子は考え込んで黙ってしまった保坂を促す。

「…君は」

伏せがちだった目を笑子に向け、保坂はゆっくりと口を開いた。

「人を殺して何とも思わないのか…？」

笑子は一瞬目を見開いて眉間にシワを寄せたが、直後には微笑していた。不敵に上がった唇と、妖しく光る瞳が保坂の神経をざわざわと逆撫でする。

「人を殺して、何とも思わないのかな…？」

そう保坂に微笑みかける瞳は悲しげだった。しかし、オウム返して馬鹿にされたと感じた保坂はその変化を見逃してしまった。

「ふざけるなっ！！」

拳でテーブルを殴ると、笑子はビクツと肩を震わせた。

「…怒らせるつもりはないんだけど。別に私を殴ろうが好きにすれば？」

ふん、と笑子は鼻を鳴らした。保坂のこめかみに細い血管が浮き出、叩きつけて握ったままの拳が震えている。

「殴られて死んだ方がきつとずっと楽。あなたには分らない」

笑子は脇に目をやる。本当に殴りかかりそうな勢いの保坂に記録係はオロオロとしているが、口を挟む様子は無い。あくまで傍観者でいるつもりらしい。

「だけど気をつけて」

笑子の声のトーンが落ちた。

「私、エイズだから。血に触ったりしちゃ、駄目」

くすくす笑ってはいるものの、冗談を言っているのではない事が分かった。どうしてそんな事を笑いながら言えるのか、保坂には不思議でならなかった。

他人には理解できない闘病の苦しみだと嘲笑しているのか、諦めている自分を嘲笑しているのか…。

「生まれつきか？」

やりきれない怒りを無理やり収め、保坂は遠慮がちに聞いた。

「いいえ」

笑子は首を左右に揺らした。ならば、詳しくは聞くまいと、保坂は席を立った。

「後で採血はさせてもらう。警察病院行きも考えなければいけないからな」

笑子は頷くと、念を押すように保坂の背に呼びかける。

「順平に、ちゃんと私もここにいて伝えて！！それと、大好きだよ、って」

保坂は片手を上げると部屋を出た。

+ . + . + . +

「ふうー…」

保坂は盛大な溜め息を吐いた。片岡笑子と会っていたのはほんの1時間程度の事で、取り調べとしては短い方だった。なのに、ひどく疲れている。きっと調子を狂わせられたせいだ

「お疲れの様子だな。今日は来ないかと思ってた」

鉄格子を挟んで順平は笑った。できることなら、こっちだって休んでいたかった。

「約束なんぞな」

保坂がそう言うと、思い当たる節の無い順平は首を傾げ、「忙しいんなら無理する必要はない」と言った。

遠回しにもう来るな、と言われていているような気がしたが、気付かない振りをして肩を竦めて笑った。

目の前の青年は顔こそ悪くはないが、片岡笑子があれ程夢中になっているのが解せない。こんな冷たい目で皮肉っぽく笑う江島より、もっと優しく笑う男は沢山いるだろうに……。それとも、片岡の前では違うのだろうか？

「片岡笑子を知っているか？」

その名前に、順平はピクリと反応を見せた。そして保坂から目を逸らしながら頷く。

「……ああ」

平静を装って返事をしたらしいが、目が泳いでいて気にしているのは一目瞭然だ。

「片岡はお前の何だ？」

「……、彼女」

言っただけのものかと逡巡したのち、順平は躊躇いがちに答えた。

「その彼女が逮捕されてここにいる」

順平は驚いているとでもこの事態を予想していたともれる複雑な表情をしていた。

「本当はなあ、こういう事を無闇に教えるのは違反なんだが……」

「だったら、何故そんなことを」

どうせ、会わせてはもらえないのに。どんな場所であろうが近くにいて、同じ状況下にいるのに、会って話す事は叶わない。

「片岡との約束なんぞな」

「約束？」

「俺の質問に答えれば、お前に自分も刑務所にいるって伝えてやるってな」

順平の顔が険しくなる。

「…笑子は、喋ったのか!？」

「だから俺はお前にちゃんと伝えたるう」

保坂がそう言くと、順平は柳眉を寄せた。

「笑子はどこまで言った!？」

「そんなのはお前に教えてやる義理は無いし、言えないな」

声を荒げる順平を保坂は軽く受け流す。

「ああ、お前も喋れば、教えてやってもいい」

保坂が鼻で笑うと、順平は益々表情を険しくさせて保坂を睨みつけた。

「…別に、それを知ったところで俺にはどうすることもできない」

順平は己の手を見つめて呟いた。心臓の爆弾はもう点火されていて、いつ爆発するかも知れない。そして、自分はその爆発に耐えられる力を持ちえていない。

「確かにそうだが、お前はいずれ喋らざるを得なくなる。裁判があるからな」

「…」

黙り込んだ順平に、保坂は短く息を吐く。

「なんだ。まただんまりか？」

保坂が挑発的に笑うと、順平の表情から険しさが抜けて影が落ちた。

「俺は死刑か、よくて極刑だ」

短い一生を塀の中で過ごし心臓発作で死ぬか、絞首刑で死ぬか…。
順平にとってはどちらも同じことだ。

「お前は1人しか殺していない。死刑はまず無い」

「普通の人なら、そうでしょうが」

「お前は普通ではないのか？」

順平は自嘲して保坂を見つめた。

「普通の人間だったら、こんな事はしなかった。人なんてまともな神経じゃ殺せない」

死んで当然の江島美里を殺した時の事は鮮明に覚えている。ナイフで肉を抉^{えぐ}った感触も、噴き出した血の臭いも、全て…。だが、後悔も恐怖もない。

「江島美里が仲間を殺したと言っていたな」

「ああ」

「仲間とは誰だ？それが分からなければ、捜査が進まない。江島美里の罪を暴く事もできないんだぞ！」

順平が押し黙る。昨日はこのまま一言も発しなかった。しかし、順平はゆっくりと口を開いた。

「お前は どうして そんなに関わろうとする？」

「私がお前と片岡の担当で、そして刑事だからだ」

「はつきり言っ て、お前の やっている 事は 無駄だ。罪を暴いたところ どの とうにも できない」

「お前が そんな 事を 言う のが 分らない な。 真実を 知る こと を 無駄だ と思っ た 事 は この 20年 無い」

だからこそ、この仕事を誇りに思っている。だが、順平は首を横に振った。

「なら、俺達の担当を降りるべきだ」

「なぜ」

「お前は無力だ…そして俺も。俺達は真実の前にどうする事もできなかったから、ここに入った」

この体では逃げる事も困難だ。

「お前は現実を知るべきだ」

順平の言葉は重かった。自分より20以上も年下の彼は、自分以上に深い事を知り、感じてきたのかもしれない。

順平は真つ直ぐに保坂を見詰める。暗い瞳の奥で揺れ動くのは何だろうか…。

「1つ、教えておく」

口の端は上がっているが、目は相変わらず笑っていない。保坂は息をのんだ。

「俺たちは、始まりに過ぎない」

「…始まり」

保坂はその言葉を反芻した。ということは、まだこの殺人は続くのだろうか。犯人の身元が分かっているだけに、次の犯行を予測する事も難しいし、犯人を特定させることもできない。

順平は保坂の苦い顔を見つめると、目を伏せてそれ以後の一切の質問に反応しなかった。

7月26日

あの刑事に最後に会ったのは2日前。

笑子も逮捕されてここにいると教えてくれた。笑子の、希望だったらしい。

明かりは鉄格子の向こうの廊下にある蛍光灯だけ。時折点滅しながらジーっと音を立てている。簡易トイレとベット、申し訳程度の毛布しかないこの牢は決して過ごし心地が良いとは言えないが、笑子が近くにいるというだけでずいぶん心身ともに楽になる。

辺りに收容されている人はいないのか、不気味な程静かな空間。そこに、突如扉を開く音が響いた。

(昼食…?)

それには、まだ早い。

2枚の扉の鍵を開け、横にスライドされる音は静かさに慣れた耳にはやけに煩く感じられる。

コツコツと響く足音は…2人分で、あの刑事の重々しい足音ではない。しかし、聞き覚えのあるリズムも混じっている。

順平は耳を澄ませ、身構えて廊下を見据えた。

「江島順平だな」

順平は目を見開いた。現れたのは、視線の鋭い中年の男と…

「笑子…!!!」

目隠しをされ、片手には手錠が付けられている。

「その声、順平？順平なの！？」

「笑子！」

順平は格子に縋りついた。笑子は声のする方に歩み寄ろうとするが、手錠を持つ中年の男がそれを許さない。必死で腕を伸ばし合う2人の距離は、数センチのところまで引き離されている。

「大人しくしろ、江島順平」

しかし、順平にその声は届いておらず、笑子の腕を取ろうと必死になっっている。

「江島順平！」

怒声に視線を隣の男に動かし、順平は動きを止めた。初めて目にしたその黒いものがどういう働きをするかを順平は知っている。

「な、にを…」

「え？順平？？どうしたの…？？」

すぐに笑子が順平の異変を感じ取り、不安げに眉を下げた。

「下がれ」

順平の目は、笑子の頭部に突き付けられている拳銃に釘付けになっている。

「…下がれ」

2度目の忠告に順平は浅く頷くと、息苦しさを感じながらもシリジリと後退して牢の壁に背を付けた。

「止めてくれ…」

口がひどく乾いている。

「妙な動きしたら、撃つ」

「えっ…撃つ、って？？順平？順平！」

笑子が激しく身じろぐと、男は軽く舌打ちして凶暴な光の宿る瞳を笑子に向けた。

「落ち着け笑子！！動くな！！」

「!?!」

順平が慌てて叫ぶと、笑子はピタリと動きを止めた。

「いいか、落ち着け。俺は大丈夫だ」

笑子が戸惑いながらもコクンと頷く。男はその様子をみて愉快そうに笑った。

男は胸ポケットから小さな鍵を取り出すと、それを鍵穴に差し込み順平の牢を解錠した。思わず駆け寄りそうになった順平を、男は視線で諷め、未だ突き付けている銃をチラつかせた。

笑子を牢の入り口付近に座らせると、持っていた手錠の片方を鉄格子に繋いだ。ガチャンと冷たく響く音に順平は奥歯を噛み締める。

「言っておくが、この手錠の鍵は俺は持っていないからな」
鼻で笑いながら、男は笑子の目隠しを外した。

まだばやけた視界に順平の姿を見つめると、笑子は立ち上がって順平に駆け寄ろうとした。しかし、格子に繋がれているせいですぐにバランスを崩し倒れかけたところを順平が抱きとめた。

「笑子…!」

「順平! 順平!! もう、会えないかと思った!!」

涙で濡れる顔を順平の胸に押し当てる。笑子の細い体を順平はきつく抱き締めた。男は満足げにソレを眺め、ふっと口を開く。

「もう、いいか?」

急に空気が変質し、殺気が注がれると、順平はパツと顔を上げた。そこには、薄い笑みを浮かべ、仁王立ちして自分達を見降ろす男がいた。

男は急に順平の肩を鷲掴むと、冷たい床に押し倒した。背中を打つ

て、息が詰まる。順平は咄嗟とつぱに胸の辺りを抑えた。

「つく！」

「順平！！」

笑子も驚いて手を伸ばすが、順平にあと少し届かない。

胸が詰まる感覚はあるが、そんなに大事はないみたいだ。順平は背を起こしながら男を見上げた。

「…お前ら、余計なことしやがって」

低い声には明らかに怒りが含まれていて、肌を刺すような視線が順平と笑子に注がれている。

「余計な事は喋っていないだろうな？」

順平と笑子は唾を飲む。

男は苛立った様に顔を歪めると、ゆっくりと、その片足を持ち上げた。男の意図する事が分った順平は青くなり、笑子はありったけの声で叫んだ。

「止めて　　っ！！！！！！！！」

ドガッ！！

「うぐッ　　ああ、あっ！つく…」

ドゲン

躊躇いなく下ろされた足は、順平の左胸を捉えた。鈍い音と共に順平は目をカッと開き、大きく痙攣した。

ドグン

心臓は不気味な鼓動をする。

「う、ああ……!!」

何度も経験した発作の症状。けれども、これほど強烈な痛みを伴うものは無かった。

「イヤアアア!!! 順平! じゅんぺー!!!」

苦しみにのた打ち回る順平の姿に、笑子は半狂乱になって泣き叫んだ。その声も、順平にはもうどこか遠くの出来事のように感じられる。

頭まで突き刺さるような痛みと、涙で霞み揺れる視界に、笑子の姿を見つける。

「……っ……」

声を出そうとしても、上手く出なかった。口だけを動かしてみたが、伝わっただろうか……?

『すきだ』

いろいろ言っておきたい事はあるが、いざ笑子を前に一言伝えるときしたらその言葉しか出なかった。

ドグン。

順平の心臓は最後に一度大きく痙攣すると、完全に沈黙した。

「順平!!! 誰か薬を! 医者を呼んでっ!!! 順平が! 順平かつ!!!」

笑子は手首に血が滲み青黒くなるのも構わず身を乗り出そうと必死

になる。無情な金属音だけが響く。
苦しそうに胸を押さえ、のた打ち回っていた彼は、ついにその動きを止めてしまった。

「じゅんぺ……い……」

その間際、彼は自分を必死に見つめて、苦しそうに喘いだ。ゆっくりと動く唇は、自分宛の最期の言葉。

『好きだ』

それきり、蹲ひざまる様な恰好でピクリともしなくなった順平の体を笑子は涙を垂れ流しながら茫然と見つめた。身体に力が入らずに、へたり込む。さっきまではあれ程流れていた涙も、今は流れているかすら分らない。あまりの事に、驚いて茫然とした。

笑子は、頬を冷たい何かが伝う感触はあったが泣いていると自覚できていなかった。

「お前らが何をしたいか知らないが、大きな動きをされると迷惑なんだよ」

中年の男は順平を忌々しそうに見下ろすと、足で脇腹を蹴飛ばした。「止めてっ……!」

笑子はヒステリックに叫んで力の入らない体を順平に寄せようとする。しかしその直後、動きを停止させた。

ゴロンと引っくり返り仰向けになった順平の表情は、決して安らかに逝ったとは思えないもので、顔が強張っている。両手できつく胸を押さえ、今もなお苦しみを引きずっている様だ。

「…順平…」
そつと、優しく呼びかけてみた。彼の表情が少しでも和らげばいいのに…。
けれど、血の気を失った顔は暗がりでも分るほどに青くなっていく。光を失った瞳が笑子越しに虚を見つめる。

「何も考える必要はない。ただ、お前らは自分に与えられた役目を全うするだけでいい」

男は笑子の前にしゃがみ込んでその顔を覗き込む。笑子の視線は男の後ろの順平に注がれていて、その瞳からは留めなく涙が溢れ出していた。

「くくつ。お前らに人を好きだと思っ心があるとは思わなかったな」
口元を歪め蔑むように笑う男は笑子の顎を掴んで自分の方を向かせた。

「だがな、それはしよせん偽物」

涙で濡れた瞳が鋭く光ると、男は喉の奥で笑った。顎を掴む手に力を入れると、笑子は顔をしかめる。

「違つとも言いたそうだな。まあ、好きに勘違いしているといい。俺達がお前らに望むことは、生命活動の維持だけだ。それ以外何も望みも求めもしていない」

男は乱暴に手を離すと立ち上がり、銃口を笑子に向けた。激鉄が上がる重々しい音が牢に響く。笑子は真つすぐに銃口を見つめた。いつ火を噴くか分からない闇は、ひどく恐ろしかった。

視線を脇に落とすと、苦しげな順平が横たわっている。笑子は唇を噛み、悲しげに眼を伏せた。

「覚悟はいいか？」

その声音はどこか楽しそうだ。この男は順平を殺した時のように、

何の慈悲もなく自分を殺すだろう。

死は、もう怖くない。

順平が待っていていてくれるから。

けど、

悔しい。

どうして、死ななければいけないのだろうか…。

「使い捨ては使い捨てらしく、…死ね」

男がそう吐き捨てた瞬間。

ズド　ン…

木霊するように鳴り響いた音と共に、笑子は順平に寄り添うように倒れた。

+・+・+・+・+

「なに！？江島と片岡が移されただと？そんな話聞いてねえぞ！！」

保坂は申し訳なさそうに頭を下げる看守を怒鳴りつけた。

「今日の昼前…。自分が休憩している時に、上が移送したようで」「くそっ！」

片岡笑子に話を聞きに行こうかと来たが、江島順平と共に刑務所を移ったらしい。2人の担当である自分に何の一言も無くである。

「どこに移されたんだ？」

看守は困ったような顔をして「分りません」と呟いたあと、ハッと驚いた。

「残念ながら、君には教えられないよ」

「!？」

保坂が後ろを振り向くと、制服にいくつかの栄えあるバッチを付けた男が佇んでいた。顔を合わせたのは数回だが、すぐに名前が浮かんできた。

「柏原警部!!なぜこのような所に…」

保坂は居住まいを正して柏原に向きなおった。キャリア組で自分より少しだけ若い柏原は無言で頷く。

「それより、教えられないとはどういうことですか？」

「上からのお達しだ。そんなに睨まれても、どうすることもできん」

「申し訳ございません…」

知らず苛立ちが顔に出ているらしい。保坂は頭を下げた。

「君も取り調べで聞いた事、知った事は忘れるように。口外無用だ」

「…はい」

柏原は保坂が了承するのを確認し、また無言で頷くとその場を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7819d/>

E=ベイビー

2010年10月12日07時37分発行